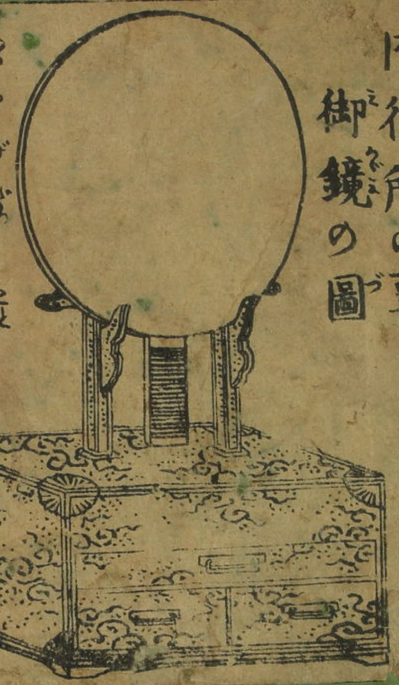
婦女庭訓

陟陟妹脊山

六〇

内侍所の事
御鏡の圖

入鹿解脱れ事
吉野静謡れ圖



へ13
3100
5止

3100
5

陸奥妹背山　巻之六

江戸　振鷺亭主人　著

第十　鹿毅恩の套　附り芝六忠信の事

雉子しそだ門内ゑ走り入視るに堂上あゝ王御坐を堆せし笑多の宮女かゝづきて酒宴の家中より階下ゑ玄蕃尤添大阿防羅刹の鬼のごとく七人の侍子共一捆ゑ郷て庭上ゑ扯きそうり雉子こゝハかゝるしやとゝ共人ども事かゝ我子も屋知ね侍みてゝ玄蕃尤添を捍棒を勢面ゑ吹りあげて辱も我王の御酒宴の御殺ゑ負ゆゝね命共殿ゑは冥加なき童ゝと喚りて連打ゑ搏ゝうり子等こそ一塊となり兄弟互ゝゑ

蓋ふり我こそ搏まんと犇ハ岡まど傳ュ起事ふぶね形勢ハこれ
ぞ叫喚黒繩の呵責ふるしむ体相もかくやとぞろ母の牙ふ
その哭泣の心ふ徹し紅涙あぞこれなろ時ふ玄蕃左添を鱶七
を伴ひ出く階下ふ蹈踞らん鱶七七人の子ふ将て人質ふ母ね
らせ志をあらにしいうえハ下仕ふも召まんやと惕ればエ斜ふ
鱶七ハ直下るひ前の手れ物をたぐぞ人質ふ母ぞれば
今ハ疑ふあふぎれどいまぞ你ぐ子なるや子なふねうその真
偽知ぞていく責て自然子多ぐはういうせよと宜ふ鱶七
果ていとやとれ沼何条子の七人ぞ今目前責殲して
うせ奉らん元より這奴多ぐ母ハ茨夫をしらくて弃去るほどろ
悪人ふて和尚惱ればぐ袈裟ふて
多蛆虫ふも忍ひハ
合せてうと咽消も失れた心の苦しさ針の毬ふ坐せるそひるり
狂面を背てかうしにやがて鱶七奇と蔓を両頭ュ捆て松の梢
より高く釣さげ下ふ松葉を堆くはくひ火ふ烘つ
ふ煽さと然て黒烟天ふうづまれの鱶七梢ュ向て你等ぐ為
ふこれ我ハ假の親ふるや又真の父ふるやとらくべ奇莽烟ュ哽咽
苦とつもひとしくいづく迄も父ハ父真の親とおもふの孝
行ふる事あらんや黄嬉の旅路をも見つれて急ぐめぞ
殺してよと嘗うしを鱶七笑嘲君ふ召つ〜や此奴多下官を
縁の親ュ中せば狂燈殺て疑をらしてまんらんとらめく索を
曳つり上げ下し責ハあこれや姉ぐさうて縁ふ焦るれば妹ハ木

のそふに肢をあをにもえ身命は消々とあり火を炎をと然
舞る目前直とうる母は燻さうより堪ぎうく大焦熱の苦しとも
是あいうではるべし王は此体をえて幽地よげふ宜ふあふも
ふ涙や鱸七妊女の腹を剖銅の檜を滾して人の火坑に落ると慰と
するなどは珍しかふぶ何ぞ又奇なる酒宴の具をそんよやとあふ
さられべ鱸七畏て聽搗臼を庭前に抱出る何さられぞとえをぞ
三徒を地に推伏て其上に臼を鎮に載板松呉松板松を一塊に捆
做てむさいふ臼の中に推ここ既に搗殺をべき搆をぞ拵らり王是
やこんなりひてこんなりもいくぬよれ御殺よいざ一献くをん雉子酌せよ
と例の大抔を拳うあ人が雉子は心慧に雉子飾くもてるぶ人ど
甚顛倒をこんせまじと坐をるめられ若しさよ庭あ鱸七こや搗殺

さんとかち杵ふりあげて三人の子よいうに我は真の父の仮の親は但
ゆがこりしをやといくば子をを殺メかとうくいうく母こあは我く父
弃たまへ父さ母独がかるゆいくとく餅に搗てこはれやこいくば
鱸七眼を瞋しやよ真の父ふふば尚搗こうしくまんと云ふ曳々
声を出し噇そとこそ搗ふりふれ三徒は下に推ひふりふれて阿とも
呼ともいわどこ人の子は叫声も牽ごこそ叱ふ呻吟るとその
搗音の胸に郷音け雉子は五勝六勝も裂ちぎれ三百六十乃骨
節をも齏粉に砕ちり九十九万の毛孔より渾身の鮮血滂沱
出せる忍ひをあせり取のとされ乙姿は血脈の乗に徹てや痛つ
も地を匍匐鱸七が脚下に倚まこわれ撲地と蹋ふりしが乙姿
火の中に投これて忽ち編身焼焦を燃炷のごとくなりと哀り

ふう七

鑑七大口あいて打咲ふ童餅もつけてゆふ鬱賢ふそるへんと一人
一人死しる子ゝ搔抓ぐ臼の中より挈出さそ又ほとすれど紙ま一目
それが目口鼻耳より血咯々と泝て鳥除保出脳ゝ拉れ骨も折腕
膊壞し為体ハ一百三十六地獄を一るとふ集るも又あるほゝ責ゝ
うけ死る非業とる母の啼も泣まね仏の中いうぐう悲うるん
王ゝハ御意ゝ人いとうるしハ大杯を以て鰐七ゝ仰ゝ潔々
我疑ひ大ふ譯て今こそ你肱股腹心ゝう不淨を清めあふたゝ
て天盃ゝ給ゝ人なゝれよゝく宣ひ桓そとして奥の殿めぞ入
よゝふかゝて盃を賜て酒宴ふ付をうゝ鰐七ゝいまゝ給しが
こゝも秋雨蕭々と降つゝ最静る終夜王雛鳥ふ今枕を
流せ古雅輔ふ酌とゝせ幾多の女蔔達とりかこゝそ酒宴乃奥
ゝうぐ好りしが竟ゝハ雛鳥の膝を枕としゝ生く熟睡ゝ後ハ女蔔
達王をゝ早ふ帳臺の内ふ移しゝ生ゝ吻と
ゝ息を吐て潸ゝうの生仕ゝくそ眠るゝも即仆前後も知
そこゝくゝれが雛鳥あゝを閑て各くの眠るゝそ天の與へ今夜ゝそ
じゝ続を奪ひとゝべゝさ付至ゝわゝと眩目くゝせゝれが古雅輔その
仏を弘めゝゝれ平日本國中の法ゝ懼恐鬼神のごゝくいふる
王を欺ゝ課せね南無渚天法佛我を加護して神境我をゝ
ゝくせゝらび給へゝと四方を拝しゝ嗟しゝ侍所の内ふ潛入しゝ
下じて御境をゝう仰ゝよゝくゝも天運ふゝるゝ入しゝとおし裁ゝ喜ひ
ゝ危ふゝて庭上ふゝくゝて敵ゝる疾々ゝ出ゝよゝと聰を以ゝくゝ
ゝび古雅輔ゝるゝそゝと打頻ゝ拳頂を跳越んとしゝりこふおりひゝげ

ゆゑ、脊後よりえいと抱きとめる者あり古雅捕なりと驚いたるに
さて面見ず仕課なる大石式いま一歩のゆゑ己れ無さ見しに
さよしと涙をながしくと流し憤りなれば口ふさとあて声を
殺るなれある古雅捕我いこれ間なる三郎に町雅元なり芝六と申す偽
かく仕丁の陣ふ様を換て入こしい内侍所をなり奉り再び赤松の
家を興すべき父大判事との諜合なり御剣を懐を逐てふ見しい
長ひ為ると王豫ひるるもあふんと芳野川の波を止め難固
しく関吏あれば為く此山を脱出べきなりと我いるあも
さく御清を北朝ようとうふんかくどうゆてい我を疑しくなるれん
か見ふ父の暗闇あり御剣へこれ女子なるべやとりくなるれば古雅捕
なぜさんれ父なぐ出なるね密事を覚るなるめい疑もなく雅元いふ

御鏡をとしなるるさんといへば雅元恭しくなるり附献べ
うつし己咎られい千緒万端益なるるふんてや去べきなり附わるり御剣を
後の貪欲を脱れべき謀ありと其剣の白丁ば扯裂その布とりつて
古雅捕雛なるば面を縛め二人共を柱ふ捆属て起ちんとなる折なて
あれ其夜廻衛の清士まうて来て縛る破めやした者ども鼓ばうち
なるれば芝六跳かるて元を猛繋し唯一心ふ御鏡を掻抱き墓の
上まりひるるると跳ね呼いこれなるる数十丈はして芳野川の逆ふく波ふ
ざんぶと入てねさまをなんて濁なと向の岸ふ泳ぎなり
かくて間なく三郎ば雅元ば翌日京良迄流伸し知ふ芳野川の
関吏なる後を赴て覗まり布晒の河糸ふて逃詰自居なり丈落
くぞ捕へとの二声なるふ晒場の者ども数十人おるとりかとて

虜ふせんとかゝるしを雅元原丈軽擾打抜の達者ゐれべ飛ゐ
のごとく翔て電光のごとく閃て晒せる布ハ半天ふ飄て気色
捕ふふ如しくも千変万化をはゝし虎賁の勇を顯せば只一人
とゝいへど敢て近づく者もなし甚うちふ雅元万死を出く一生
ふ値恙なく御蹟を守護して京都へ落伸ゐれと雅元此付の
働天晴観事なりと人ふとぐぐりねとう
さて又芳野殿ハ其劇おゐ〻ふ〻ハ〻ぐ〻そも此内侍所とゝへ寢殿
の窃ふちらひ豆の間も淡〻密ちく封じておゐる金典侍内侍雅
ぐハ近ゝりがゝれ而ゐるに辻丁ゐとの立入べきようもなしいづれ侍御の女
ぐゝのうちにまゝ忍ぶ者ふんと疑ひかゝゝ厳ふ拷問ゐれども一人も
我涼しとふ者なし王大ふ顛倒して内侍所再び北朝ふ奪ゐるゐ予

むわんゐのゝ鏡ハ此宝鏡ハ付い南方の王威ゐとくことゞ皇
統の滅亡ゐりとて〻〻穿鑿ゐりとゝ〻〻も曾て其手がゝゐ
ゐ〻ハ此ゝ人ハ我ゝづゝ魔行の法力を以〻食滅を遂へしとて〻〻
一室を修法の道場ふ擬せられ荘厳ゐる壇を設け七日断食て盈
筏荒行の秘法をゞ勤ゐふ夫佛法不可思議ゐりとゝゝせども仏
天の冥力知ゐるゐ容易ふ〻〻ゞ最深秘密の法術ふ〻〻
嫌疑の附其證を立地ふ知る一ッの方便ゐりされども正法ふ辛特ハ
又佛ふ〻不能ゐりてかゝる怪〻ゝ修法ハ邪法のゝゐゐて当面の吏論
を沸がゝくもゞゝしゝて王今修ゐゐ所ふ法の如法の術ふ〻〻全く
外道の邪法ゐゞゐりされ抑此修法とゝゝ壇上の中央ふ菓人敢
を立置壇の四方ハ維ゐハ貪欲のかゝれべゐ疑〻て人〻ハ発せしゐ秘

呪を唱へて祈るに呪力に乗じてかの人形むのづと動き出で方に維の内
かの棄る人の前に近づき正に其人と指こと寄姫の妻嫉みりとかや笑
者舌をふるひ誰身のうへ突傳まふんと肝を冷して懼めて
七日満ずる日ゆもすがらぬまに宿うり潔、糸させくで結ばせられまづ壇上
著坐の上臈達正北子の方に坐しうるい第一お雛鳥典侍より艮の隅
ゆへ春雨内侍東卯の方に坐しうれい真物典侍巽の隅ゆへ夏素内侍
正南午の方に坐しうへふる典侍坤の隅ゆへ秋藤内侍西よりろ
て酉の方に待内侍乾の隅ゆへ雛子内侍で坐しうれ壇上ゆ
玉髪を被浄衣に荒索の太緒をかけ勇猛の眸さかしまおさけく血
を濺祈る声もうるがうりうり香烟和ぐ冥々震くうれ形勢身の毛
いよ取まく冷じるんどいふだうゆ一かくて王印さぐしく契び飯命頂礼

諸天魔群魔滅ぶ人の知しめたる人と魔法の念珠を推りんで紙密
の魔呪を貴うけく祈られ給ふ法燈の新さもりのそこに折こを
あれ壇上の菓人形不測や自然と動揺ろふぞそこや我身のうへゆ
ふるかこ女臈達ここの名を失ひ肝脱魂でゆうり驕さふ走り迷ん
とそれども腰折坐て慄ろうゆく高声に祈禱ばかの菓人形ふる
ごとく中央をゆるぎ出子の方へ向ひ揺ふ動まるゆ雛鳥の
ゆををして近づくとぞうへしが又中央へぞ飯りろる王こゆ験の若ぞ
いま一祈と息をもはるで禱れ名ばふるひ人形ゆを出同じく子ろ
方に跳り向揺ふと雛鳥の前に近づと躍躍てゆしが
又本の坐に立飯りて走りろ名皆々の胸中にこや其本人雛名
とふられうとゆ思へども一と指ゆあらざれい決定ろ処も

十之六

あり此こ遇こて極めてうんと咎く堅噬を飲ぐこんの所よ祈よ乞こと
てかの人戒又推返して劫さ生寮のごと〳〵雛鳥の方へむさ真一文字
ふ走るとこんへしぶ樸さあふ乾の隅よねし紙子ぶ軀よ乞こと抱つさこる
王其つよく坐を起て壇上よりかけ下て絲ひ雄子ぶ髭ばとつさひつ
ふせ月日を敷く我両眼を掠め何方ふ神鏡を隠せしぞ白状せよと
責さいるあい雄子今ハ何をかくしはあるもん仕丁芝六とやきそを
吾傑が夫ふて内侍所の御鏡いうえもなえ宝しさ夫婦不圖盗乞
を萠しして夫ようぐこせ何地ともあく落しうとや段々よしさを
まふともかくこの命恨色いぶや御心任と乞沉ム王勃然と嘆て
歯を咬鳴し絲ひいしくもとうし小ぶろこさ女神鏡よ乞かくるこふへ
必定北朝の間者ふふく荷騰の奴原一々白状させんと撲地と踢

仆し雄っあるとうふへと鳴りこあへバ鰐七足ふひと御前よ蒐出さ
れ太刀ば抽よりて安く雄子の肚ぐつと衝立て起して頂へうけ一文字ふ
刺とわぜば断末間の苦痛のありこあ云戯といあも愚ふあり王ふへ鰐七
えうこひるとく詮鑿のこれどもや為ふしとて其坐を起うあべきく
鰐の口ば脱ぬ乞地してようやく退出りりく鰐七ハ人なれを闕
て雄子をかとへふ抱起いうあきし邪智逞しさ王ふ〳〵普通の計畧
ふてハ治ぶとしりふ体が夫と形りて七人の子を人質ふ鬼いへ鰐いへ坐
おくし成雄ふあも奥へく親親への孝行ふ死を究ふる珠玉さよ云れを
恩のこあ忘よ大悪人となり王ふ仕ゆるあぞ暴悪不仁の乞ばかなひ
密ふ心腹をも探知ぬ是えのこえふ体ハ命をて乞しようる我も大切
を入手子多るも不測ふ命なをうしぞ喜べしといあ言げあや百

万の強敵を拉く英勇も恩愛の涙両ゝ翼代陣雅うすにを除て斬られば琴の緒断ね糸よりも繊子はかなき目代幼られかりても芝六御繕取るゆふと使よりもいづれの身よりも素懐なりせやてハ我身その忠信の人ゝ成代罪を深ぐやとの一心感ぞる而ゝ人形つぶ身代指こかくゐる果はかごなりそもやそも君の恩のうゝある死ねる命は惜うふびさるゆそも我子の命在らと同もえべ哀ゐ雖七いふゆうそれよこそいと新ゐれ示現あり我子名る代率こ身も労ゝと不覚皇居の築地のかとりに目睡て在つる夢ゝ両頭の鹿現れ我はこれ春日山ゝ手経る明神の使者ゐり商昔稚子殺業をすくゐれ其の恩べ酬んと影身ゆも感ゐ[illegible]が今孝子名る大鑑狂の影ゐ危難ゐのぞ。怪るべ我神自力どゐくゆ死と脱れ志も奈良ゆ伏ひね疑ゐくべ無福寺ゆいうんよと爰ゑて覚ぬとべ雖七子名を殺ー屍を谷ゆ棄ーゐど仕下名が詞あくる代夢の告ゆもの入合せ足ゐぐ事かゐふべと無福寺ゐいうゑれべゐ名る打拂ひ恙なゐく雖ゐゐう実も春日の来現ゐりて加護しなうゐふこと今ゆ感涙肝ゐ銘ぞ伝ゐうこべよやといくべ雑子隨喜の泪をうゐあゐ唯遺や有がとくゐあくたる緒環のもひの魂の糸きれて蟬殼の雑子が子ゆ恵の間逆もそ邑西方浄土代拝こぞ息絶うきれば春日の神泳ゐ我を志れ釈迦牟尼佛世ゐいでこゐやゐ月の代代照ゐとゐ和光同塵の光を[illegible]

私曰河州神立より和列平群へ越ゐゆ嶺の傍ゆ塚十三あり

これゐうて十三嶺と名号し云云ゐゆ牽合附會せべ件の

塚ハ雉子が菩提のため十三佛の供養塚を建るの説

○十三佛とハ釈氏の説として其次第ハ墨く下学集よりて人〻
七日々々の忌の事ハ谷響集ゝ説又蠡海集ゝ論ゞ文粹及び
性灵集ゝ挙べくんどこゝふ開ゝもめくまれば漏しつ

○評曰吻々ゝれ鹿恩ゝ感じ刀杖の難をすくひ横死を脱れ志ゝ
事ゝ春日の神勅ゝ託せしハ縱令虚ゝ作ゝ出ゝ今ゝ
あれ鱗七及七人の子ゝ多ゝ忠信孝悌の者ゝ也ゝ試のこゝろ
を以帰命せんゝ大慈大悲の神明佛陀爭ゝ哀愍納受し給ハ
さゝゝんや嗚呼鱗七ハ廉直の士ゝ信心も又勇猛なれば かく
擁も著明ゝ童子等ハ世ゝ有がゝ孝心至誠神ゝ感ゝ佛ゝ
扶を得て将来赤松の家ゝ仕へ大ゝ繁昌ゝ ゝ雉子ゝ
烈ハ亡ゝ劔難を脱ざるハ宿業ゝ果ゝ故ゝ成佛得脱ゝ
ゝ疑ゝん

○又曰実相の神佛權ゝも我児ゝ搗殺ゝ等の悪虐の態を
殺割斬截等の殺業ハ一切見聞の衆生をして贍落魂銷忽
ち悪を改め善ゝ従ゝもるハ皆是巧度の冥知識ゝ狂ゝ人の
悪逆非道なるゝ聞ゝてハ却て自己ゝ省ゝ紀ゝて自ら改む
ゝさゝ況ハ人の悪も却ゝ我廃悪修善の知識ゝ春秋所
謂勸善懲惡これなり

○大判事曰王の秘法何事ぞや其法形もなく事ゝ菓人
形の動揺するゝどのゝ不ゝ思ゝ議ゝ又実の法力なくば本

人の雛鳥こそ其人形を指べきなれ却て雛子を指せるなりの不審く
と問ければ鮮なる答くいふとても死もべき命なればかの人形吾
前よりまくべ剌ちぐ死なぐやと懐裏ゆて護刀をおさえたがめ
まることいくぐ大魔王さりくも撃んとする勢ひ鈍るべくえせ
たればかの人形恐れをし後へ退きぬ飯るの二過よ及びがこ過め
ゆいりくや道よぐど只一うちとそれに抽んとせしよりもいぐも雛子
の為ひとと属ねこれ理の対なれば言語ゆいのべくく唯心中
にのこ考へこれいりと語ければ大判事大ゆ信じて云洋よ其
人形迷ひ向ふ死ぬるハ佛力も勇者に勝ことあるを
この意よ合ひ知る理の二字ゆ魔力も恐ぐこの理忠義の
精神烈をゆ壓ぐ邪毒虚よ乗ぐるゆあるべ邪ぐ

雛子本より心よ迎る処邪氣ゆ感冒されて遂ゆ一命をうしなひね
ともく是ハ一種の道理ゆて法よも理よもあるね處唯一仏乃
覚りとそなるぐ賛歎くするとなり

○第十二　神鏡飯洛の套　附リ入鹿悪夢退散の事

さるほどゆ芳野王ハ驍悍の性質日々に募て天魔破旬の行ひ暴
悪不仁をのこ娯とし聊意ゆたぐりそハ大罪として残忍刻薄非
道の濫刑ゆ付ひ民ゆ苦を措よ所をしこ今世耐よ合ひ
ぐれさても内侍所失ねる事ハ全く女の而為なれば宮中の女ぐら
一人も殺害ぐ殺害ぐべくとの命により玄蕃左源太女鶴遠の
ぐとり足どり搦ぐり廣庭ゆ引出て就中雛鳥ぐその夜内侍所乃

滅烏樂
ひなどり
諸行無常
生滅滅烏
是生滅法

直宿りしうば罪過一再重ーと第一の敷皮の上に慮て八人の美人達
いいつよおよびど笑ゑの屏その外書女房端下に至る迄宇今〳〵生成
俤でうきとくちるとあとれ昨日の夜もそでも翠帳紅閨ゐ枕の塵をそらし
金花帳の内ゐ羅綾しとゐふ分をたとえいうゐる罪ゐりとも去ゐ〳〵猶
嫌ハあくべきとかく恐くそかくひ移ゐふとゐと女禍達にくゐ掻ゐ説草
ゐあよおろれ露の才れ朝日待間ゐ消えて葛の裏茅ふの秋の風恨
こハ世くふゐど巻を亦繰返せ玉緒よゐどうとくべと吾ゐ山ゐ嵐ごど
ゐ女人ハ五障ゐ障の罪深と身をはしてゐ非業の刃ゐかくらんゐ返々
もひ泣んゐりと泪ゐかきられく伏まろべを下ふゐの女ばらゐ右と左ゐ
哭とをれ足ハいうゐる罪ゐりてゐ我〳〵ハ失ゐ世移ふでやゐ父恋し
懐しの母よと恩ゐ又ゐ北秋の藪入をゐうゐ結ゐの宿ゐりの消

息も今ハ仇ゐるゐゐと愚ゐも歎ゐり或ハ伯父伯母兄弟ハ云〳〵て、
も惜ゐうど一齋ゐ啼叫ハ哀とゐふも疎ゐり玉ゐハ哀籠の御衣ハ
襄ゐげ玉ちる剣を掣たるひ女良ども繰言を吐とも寄期とも
ゐいそげ武夫ゐふ痛腹きふにべきハ自害さとれを我慈悲ゐり
忝くも一天万乗の天子ゐづら仆錯〳〵てくとんどと奥ゐうゐ人ど
皆くもとかゐとねるゐなるゐや迚も散ごと花ゐ〳〵ゐ同じ罵ゐ倡行
死出三津ゐ伴ゐりと西ゐ迎てゐを合セ南無教主弥陀佛本願誤
らぬ助〳〵ゐと異に同音に念佛高声ゐ唱へ〳〵一同ゐ剣逆ゐゐ抽
舌て尾ゐ突ゐれば山嵐暴風ゐ誘引て四方ゐ吹散紅花の血
く血ハ滝をとして地上ゐ点ゐり王ハ太刀ゐり構く後ゐ一人々々
ごとくくと頸を刎ゐゐゐ支瓜の実ハ斬ゐりもいと易く水も脉らぬ

已ふ三十余人を撃ちてゐまゝひ雛る只一人ぞ殘りしが最後の戒儀正しく衣紋刷ひ領首さしのべて知らぬ顔王踢倒して其面を足下ふ踏へゝゐひ宛所しや恰前漢の戚夫人秦始皇が花陽夫人周襄姒が百嬪貴妃が一笑ふも治く劣れば此女后ふも備んと思ひ我心ふ遵ど始よりおのれ一人欲の色ふ迷ひ責纖ふしてゐひちゝにだしやよと宣へば虐従せし古雅輔捉桶の水を掬ひ掬て淵て御剣ふ濺うけて血を拭へば王又とゝれ惜らふ花の余波ふ沈まで我ふまとりとゝ強面君よと足ふて面ふ踏ぢり懐裏より一囚の続ふ把出ゝゐひかの芝六が奪ひ去しゝ白地なる假物ふて真の内付所ハ変にてゝゝゝせゝゐふ你実ハ此宝鏡ふ心よあらんぞや今ハ觀念と振上ゝゐふ刃の下眼とゝくそゝ

加へ一雛鳥ちゝくと起ち透さど斬ぢ絶ふ剣の下突濫ゝ一拳當と撞王肋を突ぢて呼と寄を失ひ忽昏冒と倒臥ゝゐへば沼と賢しと雛る古稚捕洟懐ふ寄ふ入ぢ難ふく御撓とり奉拉ぐごとくに蒐出ゝゐ王ふハ且くゝありむゝくと起て個然と立ゐの時ふ貝撞太鼓鯨波の声堂々たりこハ何ぞと二天門ふ走上り巳方を眺ゝゐへば真先ふ松の字の旗おしたて白地ふ天照太神と書き社紋幾流とゐく翻翻と吹ゐひる世遥の谷ゝ峯々わ屯ゐる所も色さてハ赤松京都よりの討ゐとして責寄るよとゝるゝらに単ゝとゝ推よせ二天門の四方と稲麻竹章のごとくに取圍ね王ふハ豫ての設なれど毫ふ懸ゝる鈎炮緑二三十計切て落せ百千の雷火砕けおゝそ火地獄ふあゝざれども焦熱の炎ふ身ふ焦究竟

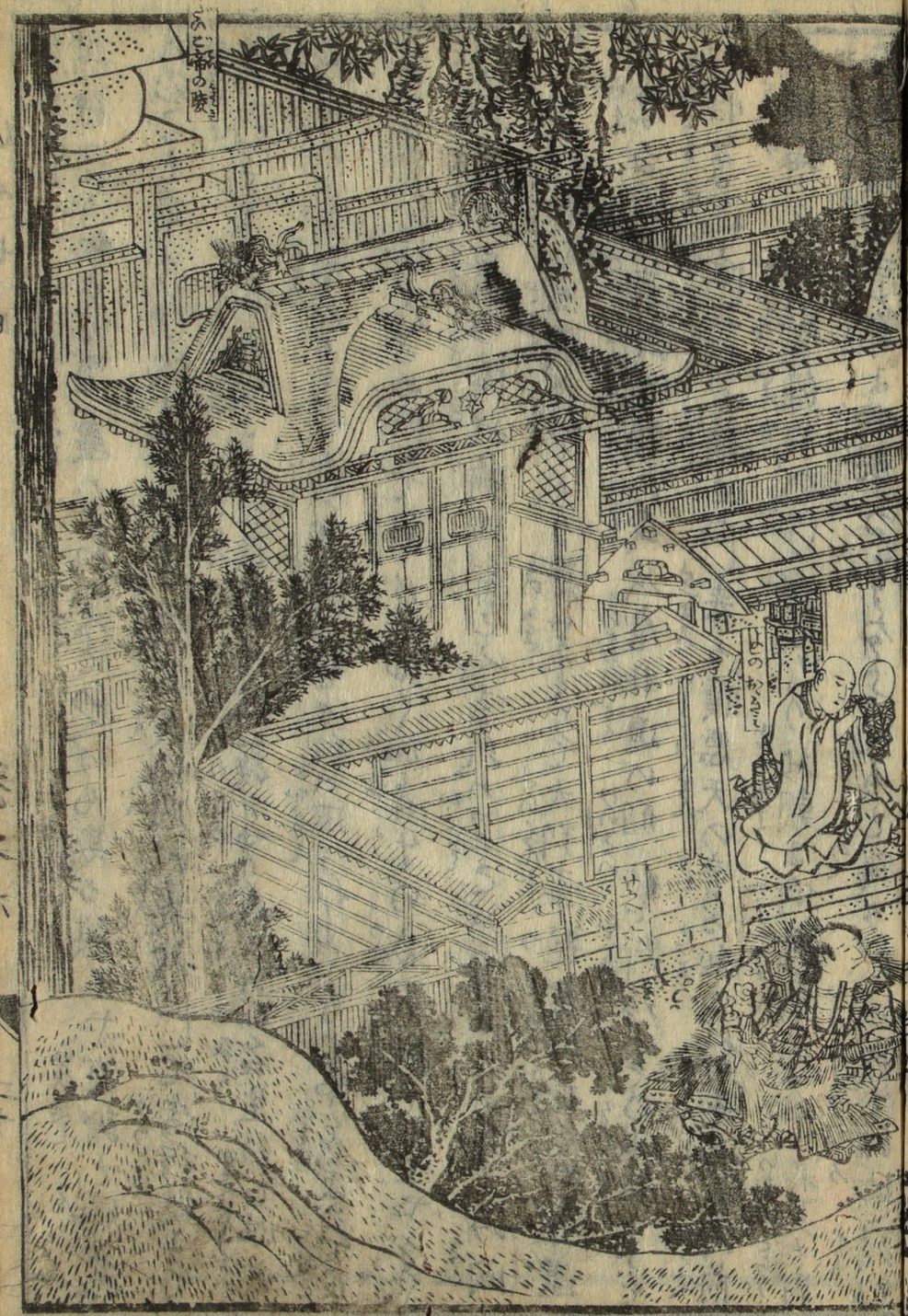
よりの玉
ふうと

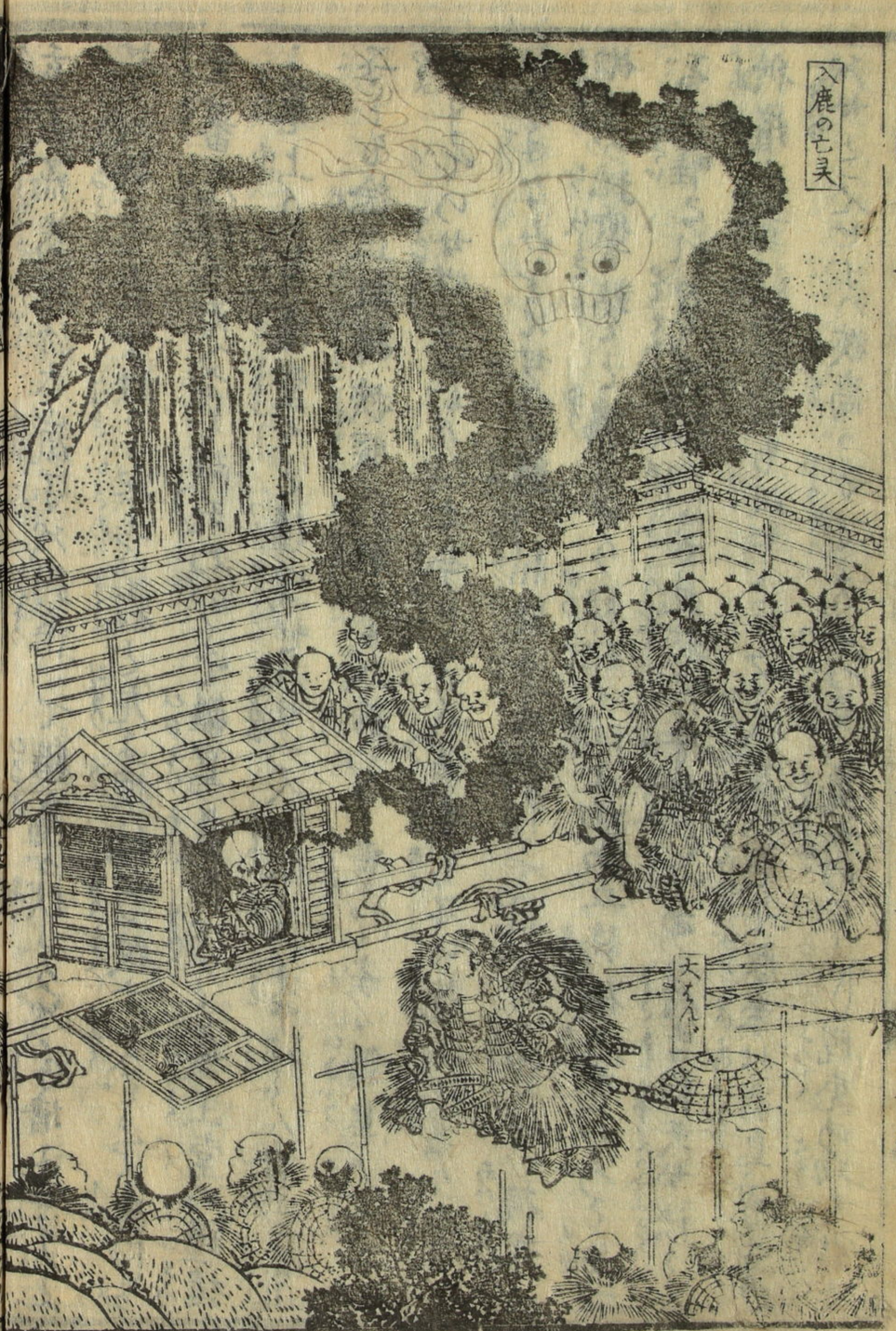
の兵共三百余騎焼殺されも負死人泝が上ふ討層て山後山ふ登
上て血を宛深々人の山うと疑るあらふ公地は蒼蠅めらと王二天門
高櫓ふ立蹲て遥ふ直下ふ向ふが後項用敵を瞪ば支弁も痛労し
かくやとなれ阿修羅が須弥頭上ふ立るごとにこしりふ向ふ軍兵
ども此勢ひふ辟易しとぶ遠巻して初うへ〻ぐるや皇居ふ火を点る
とうへく猛火の煙宮中に氤氳ふ今ハ天命足まぬぞと王居し
召ところふ昌披ふて只一人樓ふ上て東ふ者あり敵ふ慈うとうん
へばこれ鰲七ゆり大息吻て沛前ふ跪き今そかうよとうへ
其御身ぐりとゆりて敵を欺さとべし其間ハ君ハ加石生の
蔵ふ匿へといひも敢ど曳と刀ふ腹ふ突立て文字ふ極ふ倒べ手術
落涙あり文治のいろし此山ふ佐藤忠信義経の命ふかろて防

戦ふ近を元弘ふ此所ふて村上義光郎義遷大塔宮の御身がゆり生
ゆり宮代ふ〻と高野山へ蔵ふ世例もあり一旦蔵伸ふ
重て鷲界ふ覆ふぐを憑ゆり你を安二の忠臣ふれハ死期ふ語て
笑を我褐津日の魔法を行へバ天神地祇の煌ゆりて神鏡ふ
鰯がふく敵を欺くたあこ彩假物を造おひて真の神鏡の有所ハ
天地の間ふ知る者なく我こぐら龍門の滝つぼふ蜜に隠し鄙
ぞやゆるひしこと云て二天門を走下て急ぐ落行ふ向ひ鏡七
今こそ真の御鏡の有所を笑て天と拝し地ふ拝しも掬打る
あらうれ出いう慈の人〻よ我一命ふ拝ふれがぞ只今真の御鏡
の有所知ふ立ハ我門の滝ふ早くこゆ奉て〻ぐふ〻せよ
我ハ姑くも芳野殿ふ仕へられバ生ふ貪る心ふく恩の為ふ殉死せり

と大音声なる呼はりが始め怪しとて疑ひ敢て近寄者もなし
浩處ふ小袖威の濃ふ上帯領巻髪結て額巻し紅の濃衣や
被白柄の偃月刀小脇ふ掉て拔出し女武者あり二八巴板額女が再来
なるかと誤目覚しうつる風情なりしが二天門を睨へめぐらいふ
中村五郎祐直天晴の最期やとこゝ人が鎧七遍ふ直下て残端の見参
雖多なるこそはゆかしけれ此祐直ハ元来男子なれば我勇猛乃魂魄
こゝ授きあるまきれとゝひつ腰脇を拔出して拔しがその血塵うり雨
のごとくちらさをつる氏下ふ雖鳥常に受て口ふ灌とそのまゝふ
呼とだうりに作らり上ふ鎧七刀どにふ突こゝて鋒領首りと迄
貫き襲と地上ふ落うるれ鳴呼哀ハ御吉野武士い宜ふかくこそあ
らめと人ハふ誉と称人其名を後代の記録ふ留やうり時ふ又宮越

玄蕃荒巻左源太嵐子氏引卒して雛鳥が伏るを氏ふ捕ふるうんと
せし氏鎧多羽を矢ふ起上り右と左ふ掻飛弓杖十文ばうて寄りしが
玄蕃左源太あくまで敵死ぬかゝて雛鳥慈を拔んと藏王堂の鐘楼
ふ蒐上り高撞堂々と撞鳴ぜば女一人何ものの事ぞうん虜や二嵐
子ども捻止鈍棒挾脇ふ抱々氏振つく羣て寄る雛鳥大音ふて
今日までの女性とみあなどりそ今日より八変生男子の荒武者なり大力ふ
取のゆなみをえせんと鐘の龍頭ふ手をかけて目より高くさし揚曳と
拋しが地響鬱と鳴こゝろ邦那が間ふ十四五騎微塵ふなつく失て
ぎり唯これ乃八毘沙門喜見城を守禦しゝ毛の神吉祥天女法とも
彼羅を責法なるふも此やとこゝる人舌氏巻て原来此雛鳥男なり
氏女とこんせしハ狭高が方すゝう出つこれ處女のごとし脱兎の功を作を


ごこ帝の陵


入鹿の七夫
大なんぢ

謀孫子が秘せる所虚ハこれ実といふも斯る謀をや可謂と感ぜぬ
りのこそなりけれさてもまこと王母天の川れ奥ゑとして歩行跳うて
落行くまふ所より土民数十人簇り我〳〵ハ加名生の百性共
御迎のため参たりとて悉く進ぜれば王られ〳〵もそやこゑよとて古
せくまうなざんざめして舁りてゆく加名生の方へ行どしてやぐく
後西天皇の陵れ前ふ舁とくまれば王こハいふ丑とめやーみ同
〳〵へば忽ち土民の中より簑笠とりて大判事艶然出君くや御運
の季なり日来御所領の民ゑ虐非道の刑罪を行ふその眼泣くぞ
百性多逆恚てかく擒とり奉る積悪天の責る処ゑれば先帝の御前
よ懺悔して剃髪染衣の沙弟となり北朝よ御降参めぐし石見太郎
左衛門尉助京都よ供奉ゑれべうと惜ゑれば王眼を活とし給ひ

討るとおりとし給ふ念〳〵歯咬のこゑ唯
御〳〵の哭ゑ聞く天よ脱ち地を蹴る恐虎の怒ゑる勢ひ山ゑ揺ゑ動
竜輿の詫方もなんとうこそあれ慶よ黒雲一群起て烟霧朦朧と
こそ暗なり廓戦〳〵震動ゑれば皆慨ゑ強ゑ十方を失へる処よ芝六
走寄り人〳〵さるゑゑれ龍門の滝ゑりあげ御読ゑとりあげ間嶋
之郎太郎雅丸これゑ守護ゑ奉ぬと呼ゑ忽ち雲烟晴ゑり明くなる
神境の光り輝ゑりて竜輿の内ゑる之俄然と消失く晒ゑる白骨の
こそ残ゑり皆こゑいふと呆ゑ見陵の玉垣の裡ゑうろぶ深の麻
衣ゑて痩枯ゑる法師ゑが其面新ハ依然とかくぶ回満寺の宮あてぞ
在ゑかりゑるが我尚昔行脚修行を志し入鹿ゑ嫁の不ゑうに労卧て睡
より以来驚〳〵ゑ愛ゑると見て今醒ぬ入王く入鹿ゑ亡灵我體ゑ傳託

て魔行をなしつと覚ねとて念願おしまずして悔み回向をなし給へば朝日に霧の
そらゆくがぬぐ白骨も失ふこと此ことこれ畏竟神境の威徳よりて入鹿ごと
の惡霊も魔仏一如と観じて解脱を得る悪魔退散しるるより浩り
うば宮へ内侍所の法燈を守護して京都へ上らせ給へ素より御兄弟
の御仇なれば南北の御和平事故なくそのゝ上直に圓満寺へ入せ給へば
日野有光卿同資親御暇切て菩提の道に入給ひぬる行に内侍
所を取奉て禁闕に納まゐらせ主上叡感斜なゝ赤松政則罪
科赦免の勅許を被下勅事在京太夫勝元奉之加賀國迄國をぞ賜り
給へ共に賞禄を充行べきなれ共辞退して賞禄を充行べきなれ共辞退して
朝の禄を食られば今賞を貪る公臣功成名遂て身退は范蠡の同憐
とも芳野川に代を深べ蓑柴採て作業とし世をらゝ安ふしぬ狭き
橋姫を赤松家に嫁しまゐらせ太事の血脈をのこせ望足ぬと聽て尼
まり芳野の奥に草の庵をもまび朝暮行澄悟道発明るとぞ足よ
故く甚子孫に賜るべし妹脊山の押領使なれ給へ雛鳥古雅浦
顛鷺倒風の夫婦なり大に家門を旌し貞女節夫の鑒とぞなりぬ
同嶋雅元は甚身を潔し没雖数て一生不把の行人なり蛾夫の名代
雪ぬ義死中村五郎祐直は朝廷の記録なるの名留り雅子が追善の
夫位ふ勅勘免し給ひしとかやこれ一に忠信孝悌の徳よりづ由なり
なる事ども好りされば天津御璽の三種の神宝相そろひ北朝一統の世代
ふ帝し天下太平以諷人宝祚長久万歳樂とぞ祝しまつる

妹脊山巻之六大尾

貸本 小石川水道町 一番地文雅堂
所 醍醐宗治郎

傭書　石原駒知道
剞劂　藁地茂兵衛
東都書林　江戸橋四日市　西宮彌兵衛
日本橋音羽町　石渡平八
文化七庚午年正月發販
東都書林　江戸橋四日市南側　石渡利助梓

三都
發行
書肆

東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神前　岡田屋嘉七
同　通町　藤岡屋慶治郎
同　通旅籠町　袋屋龜治郎
同　淺艸茅町　須原屋伊八
同　室町二丁目　大坂屋藤助
同　本石町十軒　椀屋伊三郎
西京寺町松原下ル　勝村治右エ門
同　二條東洞院上ル　村上勘兵衛
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右エ門
同　心齋橋通北久宗寺町　河内屋征助板